

318) 橋の上

その橋は眺めの良い所として知られていた。太平洋に流れ込む川が波と絡み合って、荘大な景観を造り出していたばかりか、太平洋から昇る朝日がひときわ美しく、山の向こうに沈む夕日がまた格別だった。私と彼女がそこに辿り着いたのは、もう日が昇った後だったから、感動的というほどではなかったが、それでも雄大な光景はクルマを止めてじっくりと眺めるだけの価値が十分にあった。まだ朝早いとか、我々の他には誰もいないのが気持ちいい。景色を十分に堪能してから、次の目的地に向かってしばらく行くと、彼女は橋の上に靴を忘れてきたと言う。あまり長いこと靴を履いていると脚がむくんでくるので、彼女はしばしばドライブの時には靴を脱いでいたのであるが、クルマに乗り込むとき、うっかり靴をそのまま置いてきてしまったと言うのだ。それもまだ買ったばかりの舶来品だという。やむなく戻ることにして、現場に着くとどうも様子がおかしい。さっきは誰もいなかった橋の上がやけに騒がしい。よく見るとなんだかお巡りさんまで来ている。こちらに歩いて来る人がいたので、何事かと尋ねてみると、ここは自殺の名所としても有名で、どうも今朝、海へ身を投げた女性がいたらしいと言うのである。ひょっとして、そう、ひょっとしてなのであった。彼女が忘れた靴が、海に向かって揃えて置いてあったために、自殺した人の靴と思われてしまったのである。衆人監視の中で、今更『それ私の靴です！』とはとても言い出せない。しょんぼりと舶来&新品の靴を惜しんで、次の目的地に向かったのであります。

